

わたやれり
綿谷禮利の看護の原点を探る

— 親和学園 校祖 友國晴子との出会いから —

深澤 茂俊

An Investigation into the Starting Point of Wataya Reri's Nursing Career

— Through a Fateful Encounter with Tomokuni Haruko, Founder of SHINWA —

Shigetoshi FUKASAWA

要 旨

本研究は、親和学園 校祖 友國晴子（以下、友國）と関係のあった周辺人物としての綿谷禮利（以下、綿谷）の人物史研究である。綿谷はドイツ人の父親と日本人の母親との間の混血児として生まれた。幼少期に両親が離婚し、母親と死別するなど不幸が続き、父親も事業に失敗してドイツに帰国してしまった。その後、父親とも音信不通となり、祖母に育てられたが祖母も他界した。綿谷は身寄りもなく14歳で友國に育てられている。綿谷は友國から福祉的な素養を持った人間教育を受けた人物であった。また、親和女学校の草創期に友國と出会い、友國から教育を受けたことにより、職業婦人として看護婦になることを決めている。綿谷の生涯は常に友國に恩義を感じながら過ごし、友國の身近な存在の一人として大きな影響を受けた人物であったなど、綿谷の人物像を探るとともに看護の原点を考察している。

キーワード：親和学園友國晴子 綿谷禮利 看護史 人物史

I. 序

本論文の研究目的は、親和学園校祖友國晴子（以下、友國）と出会い、友國から教育（薫習を含む）を受けた綿谷禮利（以下、綿谷）の生涯を描き出しながら綿谷の看護の原点を探ることにある。また、友國への恩義を感じ過ごした生涯、さらに、友國の伝記の執筆に尽力した点などを踏まえながら綿谷の人物像を考察することにある。

本研究では、友國の偉業を尋ねるために友國の周辺の人物史研究に着手し、友國の周辺人物として関係性の強い綿谷についての研究に取り組むことが研究動機になっている。また、先行研究について、CiNii（国立情報学研究所）で検索したが、友國に関する研究はほとんど着手されていない。わずかに、前嶋の1996（平成8）年の神戸親和女子大学研究論叢への友國晴子の伝記稿¹の報告があるが、綿谷に関する研究は着手されていないようである。綿谷は1937（昭和12）年の親和高等女学校創立50周年記念事業に併せて『校祖友國先生』を出版した。また、綿谷は友國から仏教的な教育を受けたが途中でキリスト教に入信しており、信仰を持った生涯であったことから1989（平成元）年のキリスト教同信会100年史小委員会編『恥は

¹前嶋雅光（1996）「親和学園校祖 友國晴子伝記稿」『神戸親和女子大学研究論叢29』143～188頁、神戸親和女子大学。

われらにはまれば神に キリスト同信会の100年』同信社や1978（昭和53）年の藤尾正人編『先輩兄弟ら <大正篇>』で綿谷の生涯が取り上げられている。さらに、これらの文献を活用して本木達也『八王子だるまの作者 井上竹次郎伝』鳥影社の中で、竹次郎の娘利子とご縁のあった綿谷のことをまとめている。その他には、綿谷の1926（大正15）年の友國への追悼文「御写真の前にて」や明治時代の『萬朝報』に「涙の婦人」の紹介がある。

本論文では、綿谷の人生を表1の4つのステージに区分し、綿谷の看護の原点を探るために綿谷に関する文献・資料等を中心に分析する。

表1：綿谷の人生の4つのステージ区分

(深澤作成)

第一期	不運・友國に養育・自立期 1874（明治7）年～1895（明治28）年
	1874（明治7）年の誕生から、両親の離婚、母親との死別、父親の事業経営の失敗、ドイツへの帰国、祖母の死、友國に育てられる、日赤看護養成所に進学
第二期	キリスト教の信仰期 1896（明治29）年～1905（明治38）年
	日赤看護養成所の卒業、結婚、出産、離婚、看護婦の仕事と信仰
第三期	仕事全盛期 1896（明治29）年～1923（大正12年）
	災害救助活動、看護婦長、海外派遣
第四期	自伝執筆期 1924（大正13）年～1937（昭和12）年
	京都帝国大学学生寄宿舎舎監、親和高等女学校教諭、『校祖友國先生』執筆

II. 校祖友國晴子に育てられた綿谷禮利

綿谷は、1874（明治7）年、神戸に生まれた。当時、神戸では兵庫瓦斯が開業し神戸の外国人居留地にガス灯が点火されたと伝えられている²。父親は満25歳のドイツ人のヨハン・ルイス・ロイテルで、神戸市内で「モスリン商会」を経営していた³。母親名は不詳で満17歳、神戸の商家の娘であった。綿谷が満2歳のときに両親が離婚し、満6歳で母親と死別している。幼少期の綿谷は両親の離婚、母親との死別と不幸が続き、さらに、追い討ちをかけるように父親は事業経営に失敗している。父親は追われるように横浜に移り、綿谷は6歳から祖母に育てられた。その後、綿谷が13歳のときに父親はドイツに帰国し、毎月20円を送金してきた⁴。しかし、4年後には便りが途絶え送金も止まり消息不明となった⁵。その後、祖母が亡くなる前に友國を尊敬していたことから祖母が友國に懇願したことがご縁となり、祖母が亡くなった1888（明治21）年14歳だった綿谷を引き取り面倒を見たのが友國であった。1912（明治45）年5月15日の『萬朝報』では「祖母亦た死たるより慈善なる親和女学校長友國^{ママ}春子に養はるゝ事」と報じている。この時代に子どもを引取って育てることはなかなか勇気のいることではなかったのだろうか。

親和女学校は1887（明治20）年の秋に神戸元町3丁目の写真1の善照寺（浄土真宗西本願寺派）の門柱

²下川耿史編（2000）『明治・大正家庭史年表』河出書房新社、66頁。「衣食住」の項、11月を参照。

³キリスト教同信会100年史小委員会編『恥はわれらにはまれば神に—キリスト教同信会の100年』171～174頁。

⁴週刊朝日編（1987）『値段の明治大正昭和風俗史〈上〉』朝日新聞社（朝日文庫）、575～579頁。また、「明治時代の『1円』の価値ってどれぐらい？」（<http://manabow.com/zatsugaku/column06/>）によれば、「明治30年頃、小学校の教員やお巡りさんの初任給は、8～9円ぐらい。一人前の大工さんや工場のベテラン技術者が月20円くらいだった」という。そのことを考えれば、20円を送金は大金であったことがわかるが、4年後には送金されなくなった。

⁵萬朝報（1912）「涙の婦人」『萬朝報』1912（明治45）年5月15号の3面記事は、綿谷がドイツのケルンで開催される第3回看護婦国際大会に参加することから掲載された。また、この『萬朝報』は、明治・大正期の有力新聞として知られている。黒田涙香（周六）が東京で創刊した日刊新聞である。

に「親和女学校」の看板がかけられたことに始まっている。友國は發起人の一人の佐伯養順⁶（以下、佐伯）に評価され、親和女学校の教師として招聘された。しかし、この時点では堺女紅場の教諭の仕事途中で投げ出して親和女学校に行くことができないことを佐伯に伝え、開校翌年の1888（明治21）年4月に着任している⁷。1890（明治23）年に第1回卒業生、1891（明治24）年に第2回卒業生を世に送り出したが、学校は發起人側と教師側との間で経営上の問題が生じ、1891（明治24）年7月に閉校となった。



写真1 神戸市元町 浄土真宗西本願寺派 善照寺本堂仮校舎1887（明治20）年
親和学園汲温会編（1987）『年輪 親和学園汲温会 百年のあしあと』23頁。

友國は上京して共立女子職業学校（現：共立女子大学）等で学びながら私学の学校経営や運営等を学び、翌年、1892（明治25）年11月2日に神戸市下山手通6丁目の民家を借りて親和女学校を再興した⁸。

綿谷は、親和女学校の第2回卒業生である⁹。卒業後、友國のお膝元で手伝いをしていたが、綿谷は生徒達から「混血児」などと言われ、悩み苦しんでいたようである。そのことから世の中の人のために役立つ

⁶ 佐伯養順は、友國家の祖父の代から親しくしており、友國が18歳のときに眼病に罹り、受診した際に出会い漢学等を佐伯から教わったことがあった。実はこの佐伯に関しては、兵庫県公館県政資料館や神戸市文書館に出向き資料室を丹念に調べて、やっと、1865（明治2）年に開設された神戸病院（神戸大学病院の前身）の眼科の医局員であることがわかった。この佐伯については、友國の周辺人として影響のあった人物の一人でもあるが、現段階では、神戸病院の開設時の眼科医であったことがわかったのみである。このことは、兵庫県史編集委員会編『兵庫県史 史料編 幕末維新2』755頁の「医員録」に「副直 佐伯養順」と掲載されていたものである。このことを知るのには、兵庫県企画県民文書課管理班（兵庫県公館県政資料館歴史資料部門）の伏谷 聡氏によるところが大きかった。現在も佐伯に関して資料を探しているのので、心当たりの方はご連絡して頂けたら幸甚である。

⁷ 大阪府立泉陽高等学校記念誌編集委員会（2001）『泉陽高校百年』ぎょうせい、61頁～64頁。「友國晴子が本校の前身である『堺女紅場』を卒業し、短期間（明治17年～20年）ながら母校において教鞭をとったことがあるという事実は、われわれ学校関係者にとっても大いに誇らしいかぎりである。」（64頁）と述べられている。

⁸ 親和学園汲温会編（1987）『年輪 親和学園汲温会 百年のあしあと』親和学園汲温会、39頁。

⁹ 親和女学校編（1905）『親和（第1号）』親和女学校、110頁。卒業生名簿が掲載されており、綿谷が明治23年度卒業生であり、第2回卒業生として記載されている。

つ看護婦になることを決意した。そのことを裏付けることとして「世の氣の毒なる人に接して活きたい」¹⁰と看護婦に志願したことが報じられている。綿谷は友國から多くの助言等を戴き、1893（明治26）年4月に受験者15人のうち綿谷を含む9名が日赤養成所に合格した。当時の時代背景からすれば、女性が自由に職業選択することは難しく、職業婦人になるためには学校の教師になるか、看護婦になるかといった職業選択しかできなかった時代でもあったことは否めない事実である。そのなかでも、底辺の人々にまなざしを向けることを考え、看護婦の道に進むことができたのである。綿谷が日赤養成所で出会った同期生には、長く日本赤十字社病院看護婦監督を務め、世界初のナイチンゲール記章を受賞した萩原タケ（以下、萩原）がいる¹¹。また後に綿谷は同期生の萩原らから温情余る計らいを受けることになるのである。

Ⅲ. 綿谷禮利と信仰

綿谷は身寄りもなく幼少期を過ごし波乱万丈の人生を送った。親和女学校にも行け、日赤養成所にも進学し、明治20年代に将来職業婦人となれる看護婦の道も得ることができたことは友國に育てられたことが大きな要因となっているといえる。その後、綿谷は1896（明治29）年9月に日赤養成所を卒業し、看護婦の免許を得ている。しかし、その年に友國から縁談の勧めがあり神戸に戻っている。綿谷は神戸の資産家手塚八尾吉の後妻となった。夫は鉱山業者で台湾や朝鮮にすることが多く、綿谷が親和女学校で7年間教師をしながら叔母お福を養ってきたことを夫は不満に思い、綿谷は夫と衝突することになり、1901（明治34）年に生まれた長女と叔母を引取って夫とは離婚している¹²。丁度、この時期、1904（明治37）年から1905（明治38）年には日露戦争が勃発した。綿谷は召集され、日赤陸軍予備病院の看護婦長として勤務することとなった。その際、長女と叔母を連れ立って神戸から東京に引っ越している。綿谷は別れた夫の先妻との間にできた長男藤郎が頼ってきたことから一緒に暮らし、学校にも通わせている。この時は、日赤陸軍病院の看護婦として勤務しており、同期生の萩原が1903（明治36）年から看護婦副取締（副監督）をしていたことからお互いに看護の仕事の面で助け合っていたことが想像できる。

綿谷は、友國が仏教の篤信家であったことから仏教に帰依し、仏教的な意味合いのある人間教育を受けていたものと思われる。しかし、次々と問題が襲い来ることに、心の安堵感などはなく、人に言えぬ悩みがあり、苦しみ抜いた時期であったともいえよう。

それは、友國が亡くなった後の追悼文で「中でも最も辛かったのは明治三十七八年日露の役に赤十字社から召集を受けて、傷痍軍人救護の為に陸軍予備病院への出張中の事、或る動機から私は基督教を聴きはじめて段々信仰をもつやうになり、遂に洗禮を受けるに至ったのです。救護結了の後其のことを報告に及んだ處、非常な怒りに触れて、悲しくも私は先生から勸氣を蒙る身となって仕舞ったのでした。この時の悲痛な気持ちは今もなほいひあらはすに適當な言葉を見附け得ません。」と述べている¹³。このことは、友國からキリスト教を信仰したことで、厳しく怒られたことからもわかるように苦悩な日々を過ごしていた。また、綿谷は「信仰に對する悔いは持ちません。けれども親以上の大恩ある先生に背いて居る形になつて更生の喜びをさへ聴いて戴く事も叶はず、只遠くへ突き退けられて親しみ近づくことを許されなかつた悲しみは、私には可なり痛烈な試練でありました。」と自らの胸のうちを述べている¹⁴。綿谷は信仰に對しての悔いはなくとも恩義を感じている友國に相談することができない悲しみと日露戦争により悲痛な

¹⁰萬朝報（1912）「涙の婦人」『萬朝報』1912（明治45）年5月15日号の3面記事に記載。

¹¹石井道郎執筆（1984）『萩原タケ ナイチンゲール記章に輝く郷土の人』東京都西多摩郡五日市町教育委員会、73頁。

¹²綿谷禮利（1926）「御写真の前にて」『故友國先生追悼 附汲温会誌第五号』親和高等女学校汲温会、136頁。

¹³綿谷禮利（1926）「御写真の前にて」『故友國先生追悼 附汲温会誌第五号』親和高等女学校汲温会、136頁。

¹⁴綿谷禮利（1926）「御写真の前にて」『故友國先生追悼 附汲温会誌第五号』親和高等女学校汲温会、137頁。

気持ちとが重なっていた。また、看護婦仲間と福音集會に参加し、入信・洗礼を受けるなどキリスト教の信仰と結びついて行ったのではないと思われる。具体的には、看護婦監督の佐藤梢（日赤2代目看護婦監督）の部屋で集會を行っていたので、何人かの看護婦らと共に参加し、キリスト教を信仰することになり、「キリスト同信會」に入信した¹⁵。他にも加藤和子（日赤3代目看護婦監督）は家族で入信し、藤沢鍊（第4病棟看護婦長）なども入信している。

綿谷は看護婦として、職業婦人としてキリスト教を信仰し、生きる拠りどころとしていたものと思われる。また、医療に従事している綿谷にとって、仏教とは違った何かをキリスト教の信仰に求め真剣に考え、看護婦長の仲間も入信する中で、自分と向き合い生活していたものと思われる。それは、友國に教えられた仏教的な生き方と友國が嫌うキリスト教の信仰及び友國に対しての恩恵との精神的な葛藤となり大いに悩んだものと思われる¹⁶。写真2は後に京都帝国大学学生寄宿舍舎監の時の「京都イエス僕會」開催時の集合写真で、中央に和服姿で座っているのが綿谷である。



写真2 京大官舎綿谷宅で「京都イエスの僕會」開催1927（昭和2年）6月18日
佐藤先生を偲ぶ會（1970）『佐藤定吉先生追想録』新教出版社。

IV. 綿谷禮利の看護を支えた人々

1. 明治三陸地震による津波災害の救護活動

綿谷は1896（明治29）年9月に日赤養成所を卒業した。「日本赤十字社は、1890（明治23）年に看護婦養成を開始した。その後、養成は日本赤十字社の各県支部へと拡大し、戦時や災害時における救護活動の礎をつくった。」とある¹⁷。

¹⁵キリスト同信會は、ハーバード・ジョージ・ブランドは慶応元（1865）年生まれの英国人である。プリマス兄弟団（ぶれんずれん）に入信し、外国伝道の志から日本人宣教師になっている。集會や伝道から信徒が増え、キリスト同信會ができあがった。

¹⁶綿谷がなぜ仏教からキリスト教に宗教を変えたのかの真相についての文献等で書かれたものにてあっていないので、正直わかっていないので、今後の課題にしたい。

¹⁷舟越五百子（2005）「第二次世界大戦下における日本赤十字社の看護教育」東北大学大学院教育研究科研究年報第54集・第1号、81頁。



三陸大津波の負傷者救護の看護婦生徒(明治29年6月)

写真3 三陸大津波の負傷者救護の看護婦生徒1896(明治29)年6月
細越幸子(1926)「明治三陸津波と日赤看護婦養成との関連」
『日赤看会誌』第14巻第1号、45頁。

綿谷の卒業直前の1896(明治29)年6月15日午後7時に明治三陸地震により津波の災害があり、日赤の看護婦に派遣命令が出された。当時の「岩手公報」によれば、「大日本赤十字社より派遣せられたる看護婦長 佐藤梢 看護婦加藤まさ 松澤みつ 綿谷禮利の四氏は昨二十三日下り直行列車にて来盛直ちに宮古方面へ向け出発せり。」¹⁸という日赤看護婦が被災者救護活動に来た旨の記事があり、災害派遣班のメンバーの中に綿谷も入っていることがわかる。上記の写真3の後列右端に立っているのが綿谷である。

日赤看護婦の被災者救護活動は「女の兵隊が来た」¹⁹と被災住民には歓迎され、6月16日に始まり9月18日まで続いた。しかし、日赤本社の看護婦は8月15日に引き上げることになった。看護婦が帰った後、この地域に住む人々に看護の方法を修得させる必要があったが、巡査の妻二人と郡長の伯母と娘が住民の先に立って看護の方法を修得するために入院して学んだところ、周囲から志願者が続出したことが、以下に記されている²⁰。

高等学校ノ病院ヲ閉鎖セシハ八月十二日頃ニシテ山田及各出張所ハ之ヨリモ早カリシ残患者ハ二十余人モアリシカ之等ハ他所ニ移シ地方医ニシテ治療シタリ赤十字ノ看護婦去リシ後チ患者看護ナキ為メ預メ地方人ヲシテ修得セシムルノ必要アリ巡査ノ妻二人郡長ノ伯母ト娘トトモニ率先シテ入院セシニヨリ四方ヨリ志願者続出スルニ至リタリ

¹⁸岩手公報(1896)「看護婦来盛」津波デジタルライブラリー、1896(明治29)年6月24日
http://tsunami-dl.jp/newspaper/IwateKouhouM29/IwatekouhouM29_June24_02#section-f430d88d9a952ad95c225e9f24229199の記事による。

¹⁹鈴木裕子監修 財団法人東京女性財団編著(1994)「萩原タケ」『先駆者たちの肖像 - 明日を拓いた女性たち』62~63頁、ドメス出版。

²⁰細越幸子(1926)「明治三陸津波と日赤看護婦養成との関連」第14回日本赤十字社看護学会学術集会『日赤看会誌』第14巻第1号、45頁。

よって、綿谷らは卒業間近の6月15日に三陸地震の後の大津波による被災者救護活動に派遣され、看護婦として被災者救護活動を実践的に学んでいる。

2. 看護婦国際大会に日本代表の一人として参加した綿谷

綿谷は7年間の結婚生活等の後に離婚し、1904（明治37）年日赤陸軍予備病院の看護婦長となり、1910（明治43）年1月に三井慈善病院看護婦長として就任した²¹。この三井慈善病院は、1909（明治42）年3月21日に福祉の精神と高度医療を目指して、三井家による100万円（現在の10億円以上）の寄付によって設立された無料診療を行う唯一の民間病院であった。ここでも綿谷は、底辺の人々にまなごしを持って接するこの病院の看護の仕事に目を向けていることがわかる。つまり、三井慈善病院が福祉の精神を大切にしていることは綿谷の精神とも共通している。それは友國から思春期に生活の中で教えられたことが原点となっており、底辺の人々へのまなごしとして看護の仕事に反映しているものではないかと思われる。そして、綿谷は三井慈善病院で草創期の看護婦長として活躍していたことがわかる。すなわち、1912（明治45）年にドイツのケルンで開催された第3回看護婦国際大会に日赤養成所の同期生で日赤病院看護婦監督の萩原タケと日赤病院看護婦長の山本やを（日赤養成所第12期生）が派遣された。また、綿谷も同行することになった。

当時の「読売新聞」の記事では、第3回看護婦国際大会（以下、大会）について3回に分けて掲載されている。まず、3月の最初の記事では「来る八月四日より独逸ケルン市に於て開催される第六回看護婦万国聯合會に本邦看護婦を代表して日本赤十字社病院援護看護婦監督萩原タケ（35）同看護婦長山本やを（32）の二名は委員として列席を命ぜられ昨日辞令を日本赤十字社本社より交付されたり」との記事と萩原と山本の経歴が紹介されていた²²。次に、3月の2回目の記事では、日赤の小澤副社長が内訓として大会に参加する2名の看護婦に大会終了後に英仏独の3カ国の看護養成の視察を命じている²³。さらに、6月の3回目には「尚今回は前記兩名の外三井慈善病院看護婦長綿谷禮利子も同行参列する」という記事が掲載されていた²⁴。3月の段階では綿谷が大会に参加することは決まっていなかった。しかし、綿谷について「涙の婦人」として『萬朝報』の5月に紹介され、「禮利子父に別れて二十余年一日と雖も忘るゝ暇なきを同窓生が同情し萬国看護婦大會あるを幸ひに運動して派遣さるゝ事と為りしものと聞く」と記事は結んでいる²⁵。

すなわち、日赤の同級生は綿谷のこうした境遇を一部始終知っていたのではないかと思われる。綿谷の思いをドイツで開催される看護婦国際大会に参加することで、20年以上も会っていない父親と会えるよう実現できることを考え、綿谷が大会に参加できるように運動し、派遣されるようにしたのではないかといえよう。何よりも日赤養成所の同期生の萩原タケ看護婦監督の力は大きな原動力になっていることがわかる。同時に、三井慈善病院事務局長の船尾栄太郎の力も大きかったものと思われる。この点は、以下の一文から読み取ることができる²⁶。

²¹萬朝報（1912）「涙の婦人」『萬朝報』1912（明治45）年5月15日号の3面記事に記載。

²²読売新聞（1912）「看護婦万国聯合會」『読売新聞』1912（明治45）年3月24日の3面記事に記載。

²³読売新聞（1912）「派遣看護婦の使命」『読売新聞』1912（明治45）年3月25日の3面記事に記載。

²⁴読売新聞（1912）「赤十字社看護婦の渡歐」『読売新聞』1912（明治45）年6月28日の3面記事に記載。

²⁵萬朝報（1912）「涙の婦人」『萬朝報』1912（明治45）年5月15日号の3面記事に記載。

²⁶株式会社三有新聞社（2009）『三井記念病院 百年のあゆみ』社会福祉法人 三井記念病院、21頁。

初代院長の田代義徳は船尾栄太郎の没後「船尾君は本当に苦労された。この点だけでも故人の功労は永く記念しなければならないと思う」と追悼談を残している。これに加えて船尾栄太郎は「この病院に来る人は金がなくて困っている上に、病気が心配で心が小さくなっているから親切に取扱って下さい。なるべく大声を出さぬこと。決して怒らぬこと」と繰り返し従業員を指導した。また、船尾栄太郎は身寄りのない婦人を看護婦養成所に入学させたり、養成所の模範生が肺炎を患った際には転地療養の費用を提供したりした。さらに成績優秀な生徒のために尽力し、三井家の夫人から学費を寄付してもらい、その生徒を歯科医学校と女子医学校に入学させている。看護婦の錦谷礼利は「患者の中には退院しても働けず、家に戻れば直ちに食べるにも困る様な人も少なくなく、先生は人知れずポケットからお金を渡されることもしばしばでした」と語っている。これらの点からも東京帝国大学医科大学に委託した医療レベルの高さに加え、運営においても長期的に社会に奉仕しようとしていた強い意志が窺える。

写真4は、第3回看護婦国際大会に日本代表として派遣された際に3人で一緒に撮ったもので、左の和服姿が綿谷禮利、中央が山本やを、右が萩原タケである。



写真4 第3回看護婦国際大会に派遣
長岡赤十字病院のホームページ「赤十字きっず 教えて赤十字」の「●ナイチンゲール記章(きしょう)」の項より。<http://www.nagaoka.jrc.or.jp/kids/s046.html>

綿谷の第3回看護婦国際大会への海外派遣についての記録も残されている²⁷。

三井家では科長などの職員を海外に派遣して、救療事業およびその専門とする学術を視察、研究させている。まず、明治45年(1912)には看護婦長・錦谷礼利をドイツのケルンで開催された第3回看護婦国際大会に出席させた。

綿谷は萩原と山本と一緒に8月3日から1週間ドイツのケルン市で開催された大会に日本代表として出席している。3名は6月28日に福井県の敦賀港からウラジオストクまで船で行き、そこからはシベリア鉄

²⁷株式会社三有新聞社(2009)『三井記念病院 百年のあゆみ』社会福祉法人 三井記念病院、29頁。

道で向かい7月14日にベルリンに到着している。綿谷の父親はブレーメン市内（ハンブルクの隣市）に住んでいることがわかっており、再会したのは7月25日であり25年ぶりであった²⁸。父親は再婚しており、1男1女がいた。また、父親は63歳になっており、再婚した妻にも先立たれていた。父親の家に5日間滞在した後、8月3日からケルンで開催された大会に出席した。

この大会の議題は「看護婦の国定試験、過労、社会事業」であった。大会の後は、ナイチンゲールの学んだカイザース・ヴェルト病院の見学、英国のナイチンゲールの実家と墓所を訪ねた。また、ロンドンのセント・トーマス病院はナイチンゲール看護婦訓練学校が付属しており、体験入学し、綿谷と山本は寄宿舎に入舎している²⁹。

綿谷がその時に書いたとされる手紙の宛先人は不明だが、日本に手紙を出しており、「……ドイツにて父に逢うことができ、じつにうれしく、ことに父と妹も主を信じおること感謝の至りに候」と述べている³⁰。

綿谷は友國にはキリスト教信仰のことで勘当された状態にあった。しかし、「時は流れて明治四十五年の夏三井慈善病院から命を帯びて渡欧する際、やっと先生の御心が解けはて勘気がゆるされ、信教は人めいめいの自由だから已むを得ぬとはじめて御許を受けた次第です。一中略— 實に感慨無量嬉し涙にむせんだ事でした。」と述べている³¹。まさに、友國も綿谷の看護の世界での活躍を認めるとともに、一人の人間として信仰を持つことの大切さを感じ取っていたのかと思われる。

綿谷は帰国後、大会の視察報告を三井慈善病院の講堂で行っている。ドイツ、フランス、イギリス各国の看護婦の事情を説明し、大会で話題になった国定試験が重要であると受け止めている。「高等女学校を卒業した者でなければならぬ如く看護婦試験を受くるにも一定の資格を造り学力、品性共に統一したものを以て更に實地の修練を経て一人前の看護婦とする様にすれば確かに我が看護婦界を向上進歩せしむるに至るであろうと思ひます。」と結んでいる³²。特に、国定試験については、日本の現状から看護婦間で意志の疎通を図り、全国的な団体でもできることが必要で、綿谷は時期尚早と判断して断ってきたようである³³。

いずれにしても、綿谷が第3回看護国際大会に日本代表として派遣されたことは看護史に残る業績となったものと思われる。また、綿谷は日赤養成所の同期生らの人間愛に導かれながら看護の道を究めて来たのではないだろうか。実は、第3回看護国際大会に日本代表として派遣され、綿谷と一緒に行った萩原と山本は1920（大正9）年に揃って第1回ナイチンゲール記章を受賞している。なぜ、綿谷がナイチンゲール記章をいただけなかったかについては、わかる術もないが、この年は第1回で日本人3名が受賞している。世界の受賞者は53名が受賞し、日本で受賞したのは、萩原タケ、山本やを、湯浅うめの3名だがすべて日赤社員であった。その後の受賞者を見ても多くは日赤社員であることがわかる。ちなみに、現時点のナイチンゲール記章の受賞者数は、1,411名（日本人105名）である。ということで、綿谷は日本を代表する看護婦の仲間がいたことは大きな力となっていることは間違いないものと思われる。友國先生から受けた看護の原点は「忠恕温和」（思いやり）のこころを持って人生を過ごして来たことにもつながっている

²⁸綿谷が連絡先を知っていたのは、何故知っていたのかは不明であるが、14歳でドイツに帰国した後に、4年半生活費を送ってきたことからその住所に手紙を出したことで連絡が取れたのではないのかと思われる。

²⁹本木達也（2013）『八王子だるまの作者 井上竹次郎伝』鳥影社、424～442頁。この文献では、綿谷のことについて、4章にわたって紹介している。井上竹次郎の次女の利子が綿谷に三井慈善病院で「婦長室に案内されて始めて会った綿谷禮利看護婦長は、鼻が高く、髪はふんわりとしていて、外国人のように見えた。利子がかもじもじしていると、『井上さん、これから一緒に勉強しましょう』と婦長がやさしく微笑した。利子が知る由もなかったがこの日、利子は歴史的な人物に会ったのだった。」と世話になっていることがふれられている。428頁。

³⁰藤尾正人（1978）『先輩兄弟ら＜大正篇＞』同信社、16頁。

³¹綿谷禮利（1926）「御写真の前にて」『故友國先生追悼 附汲温会誌第五号』親和高等女学校汲温会、137頁。

³²綿谷禮利談（1913）「獨英の病院と看護婦の勤務」『日本医事週報』第932号。

³³綿谷禮利談（1913）「獨英の病院と看護婦の勤務」『日本医事週報』第933号。

のではないと思われる。

V. 綿谷禮利は『校祖友國先生』の執筆で友國に恩返し

綿谷は看護婦を辞めた後、1924（大正13）年4月に文部省が女性として初めて任命した京都帝国大学学生寄宿舎舎監となった。その後、1930（昭和5）年に親和高等女学校教諭（衛生）に赴任した。写真5は1935（昭和10）年度に撮影された教職員である。綿谷は最前列の右から4人目である。



写真5 1935（昭和10）年度 親和高等女学校教職員
親和学園創立100周年記念事業委員会編（1995）『親和学園100年のあゆみ
「世紀」』親和学園、52頁。

綿谷は、この写真が撮られた1935（昭和10）年は61歳であった。卒業生であることから母校のための教育に精力を傾けていたことがわかる。それは、丁度この時期には創立50周年記念事業として『創立五十年史』と『校祖友國先生』を出版する話が持ちあがっていたものと思われる³⁴。写真6と7は、1937（昭和12）年に出版された『創立五十年史』と『校祖友國先生』である。

伝記の執筆については綿谷が卒業生であり、友國に身近に接し、精神的にも影響を受けていることから執筆者として白羽の矢が立ったと見ても不思議ではない。それは、友國の甥の嫁で友國和子によれば「傳記は材料を蒐めて事務的にこれを編纂するのではなく、精神的に校祖の御徳を傳へるものでなければならぬものですから、誰でもよいと言ふ譯にはゆきませぬ。幸ひ綿谷姉は舊親和の第二回卒業生であり、且つ校祖には最も長く親炙した人でありますので、最適任者と思ひますが御當人は其の器でないといふ固辞されたのを強ひて御願ひした次第で御座います。」という³⁵。まさに、綿谷は友國の伝記を執筆するのにふさわしい人物であったといえる。躊躇しながらも恩義を感じている綿谷は、「殊に少女の頃から先生に親炙

³⁴綿谷禮利(1937)『校祖友國先生』親和高等女学校汲温会。

³⁵友國和子(1937)「御挨拶」『校祖友國先生』親和高等女学校汲温会。友國和子は友國の教え子で甥の嫁で、親和高等女学校汲温会の副会長をなさっていた。また、財団法人親和高等女学校の理事の要職を行っており、「御挨拶」を書いている。綿谷の執筆活動の際には執筆場所の提供も行い面倒をみている。

³⁶綿谷禮利(1937)『校祖友國先生』親和高等女学校汲温会、174頁。なお、国立国会図書館のデジタルコレクションの一冊に登録されているので検索すると読むことができる。



写真6 親和高等女学校『創立五十年史』

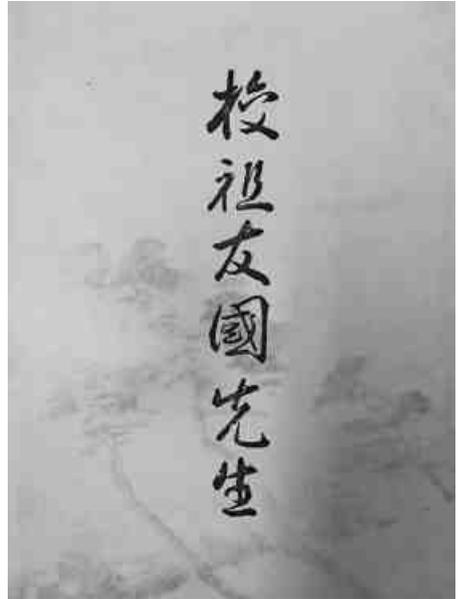


写真7 綿谷禮利『校祖友國先生』の中表紙

して両親なく身寄りのない身の、人一倍恩を蒙つて来た私であることを想いめぐらしますと、唯先立つものは先生への慕の情でございます。」と述べている³⁶。

綿谷の友國に対する恩義の深さには頭が下がる思いである。「親炙」という言葉から感じ取れることは、綿谷の生涯の中で、友國への感謝の思いの他に生きる上でいつも影響を受けてきた人であり、励まされて続けてくれた人であったと読み取ることができる。綿谷は友國からどんなに叱責されようとも「不孝な子程不憫が増すてふ親心は、これ迄他人の間に見もし聞きもしましたけども、今先生によつて直接慈母のなさけを知らされて勿體なさにこころから泣きました。³⁷」と述べている。独身を通した友國にとっては綿谷が愛娘のような存在となっていたものと思われる。また綿谷は、「操（綿谷の娘）の着衣の衿の中に何かつけ込んである事に気がつき開けて見ると、こはそも金子一封ではありませんか。『困った時の豫備金』となつかしい先生の筆蹟、私は御慈悲に泣きました。」と述べている³⁸。まさに、この友國の気遣いは愛娘を思う親の気持ちそのものであったといえよう。

綿谷が親和高等女学校を退職した年を知るのには、当時の「教職員録」がないために、唯一確認できる資料は、1935（昭和10）年12月の「親和」第31号で、「会員名簿」（教職員は特別会員）が掲載されており、綿谷の名前がある。その後、1939（昭和14）年12月の「親和」第36号で「本校現職員」（以下、教職員録）の紹介があった。その教職員録には綿谷の名前はなかった。よって、綿谷が親和高等女学校を退職したのは友國に関する伝記等の仕事を終えた1938（昭和13）年3月ではないかと思われる。

VI. 結 び

ここまで、親和学園校祖 友國晴子との出会い草創期の親和女学校で教育された綿谷禮利の看護の原点を探るために、友國の空白になっている部分を補うために、友國に育てられた綿谷の生涯を通して見てきた。

³⁷綿谷禮利（1926）「御写真の前にて」『故友國先生追悼 附汲温会誌第五号』親和高等女学校汲温会、137頁。

³⁸綿谷禮利（1926）「御写真の前にて」『故友國先生追悼 附汲温会誌第五号』親和高等女学校汲温会、137頁。

綿谷は一言では言い尽くせないほどの苦勞を背負いながら生涯を過ごしてきた。まだ、封建的な思想が根強かった明治時代の神戸で、ドイツ人の父親と日本人の母親との混血児として生まれた。両親が離婚し、母親と死別、父親は事業に失敗しドイツに帰国してしまい、面倒をみてもらっていたが祖母も亡くなり、独り身になってしまった。友國は身寄りもなく一人になった14歳の綿谷を迎え育てるのである。ここに友國の人間教育の原点があるが、以下の校訓にも見ることができる。

- 一. 誠実を旨として言行に表裏なからんことを期すべし…「誠実（まことの心）」
- 一. 堅忍不拔の精神を以て婦人の天職を尽くすべし…「堅忍不拔（耐え忍ぶ心）」
- 一. 温和従順の徳を本とし忠恕の道を完うすべし…「忠恕温和（思いやりの心）」

それは、まさに誠実に生き、次いで我慢もし、そして思いやりをもって生きることの大切さを伝えようとしたことがわかるものである。また、友國は福祉的な素養を持った教育者であり、腹の座った芯のある人間であったといえよう。綿谷は友國に育ててもらうことで、精神的に救われたことで暗く辛い過去から好転したとみることができる。また、綿谷は友國の身近な存在として友國から大きな影響を受け、人生を切り開いてきた。さらに、綿谷は混血児として弱い者の立場を知っていたからではないかと思われる。それは、自分の将来を考える中で、教師になることも選択の一つであったが、混血児としての弱い立場にあるところから福祉的な視点を持って底辺の人々にまなごしを向けるという看護の世界を進路に選択したことからもよくわかる。綿谷の人生において、友國の存在の重みは計り知れないものとなったと思える。綿谷は、1945（昭和20）年9月15日に70歳で京都において召天されたという³⁹。

今後は、さらなる調査をすすめて、友國の周辺の人々を通じて、友國の全貌を浮き上がらせることができると考えている。

参考文献

- ・綿谷禮利（1937）『校祖友國先生』親和高等女学校汲温会。
- ・堀川美治編（1937）『汲温会誌 創立50周年 校祖13回忌記念号』第16号、親和高等女学校汲温会。
- ・親和高等女学校編『親和』明治38年～昭和18年（第1号～第44号）欠本11号～13号、親和高等女学校。
- ・私立親和高等女学校（1919）『創立参拾周年沿革史』私立親和高等女学校。
- ・堀川美治編（1937）『創立五十年史』親和高等女学校。
- ・親和学園創立七十年史編集委員会編（1957）『七十年史』親和学園。
- ・親和学園創立八十年史編集委員会編（1967）『八十年史』親和学園。
- ・親和学園創立100周年記念事業委員会編（1985）『親和学園100年のあゆみ「世紀」』親和学園。
- ・親和学園創立120周年記念事業委員会編（2007）『親和学園創立120周年記念誌』親和学園。
- ・神戸親和女子大学三十年史編集委員会（1996）『神戸親和女子大学三十年史』神戸親和女子大学。
- ・神戸親和女子大学創立50周年記念誌編集委員会編（2016）『神戸親和女子大学創立50周年記念誌2016』神戸親和女子大学。
- ・山田正雄（1965）『教育史夜話』のじぎく文庫。
- ・兵庫県教育委員会編集（1967）『郷土百人の先覚者』兵庫県社会文化協会。
- ・亀山美知子（1984）『近代日本看護史 I 日本赤十字社と看護』ドメス出版。

³⁹本木達也（2013）『八王子だるまの作者 井上竹次郎伝』鳥影社、442頁。本木氏は、キリスト教同信会で聞き取った話として本書の中でふれている。今後、関係者に調査をしてお墓などを探したいと考えている。

- ・島京子編（1989）『女たちの群像 時代に生きた個性』神戸新聞総合出版センター。
- ・森 禮子（1995）『献身 萩原タケの生涯』白水社。
- ・佐藤先生を偲ぶ会（1970）『佐藤定吉先生追想録』新教出版社。
- ・鈴木裕子監修 財団法人東京女性財団編著（1994）『先駆者たちの肖像 - 明日を拓いた女性たち』ドメ
ス出版。
- ・村田誠治（1898）『神戸開港三十年史（上・下巻）』神戸市開港三十年記念会。（国立国会図書館デジ
タルコレクション）に登録による。